

中井康之
美術評論家
京都芸術大学大学院客員教授

私たちが日々使用する皿や茶碗は、特別に意識されることなく、自然な動作のなかに組み込まれている。使用者が誰であれほぼ同じように扱われ、わざわざ注意を向けることもない。こうした自明性の成立条件について、中原佑介は「日常性ということ」*で、「多くの人に共有され、反復され、特別視されない関係」という三つの要素に整理している。日常性とは身近さを意味するのではなく、むしろ“気に留められないほど一般化された状態”を指す概念である。

中原がさらに重要視するのは、日常性が成立する際に働く「差異の捨象」である。たとえばコップで水を飲むという行為には、本来、時間帯、環境、使用者の心理など無数の差異が存在する。しかし私たちはそれらをことごとく無視し、「水を飲む」という一般化された単位へとまとめ上げる。中原によれば、この差異の切り捨てこそが日常性の本質であり、日常とは一見具体的なようであり、高度に抽象化された世界である。

この理論を工芸品、とりわけ日常使いの器物に適用すると、興味深い構造が立ち上がる。工芸品は本来、素材の選択、成形、施釉、焼成といった具体的な工程の積層によって成立し、その過程には作り手の判断や身体的操作、窯の癖が深く関与している。つまり工芸品は強い個性と具体性を宿す。しかし日常使用の局面においては、この具体性は大幅に後景化し、使用者は器物を「皿」「茶碗」といった一般名で把握するようになる。日常的な反復のなかでは、個々の差異よりも共通性が優先されるためである。

このとき工芸品には、

- ① 多数者に共有される器物としての一般化
- ② 反復使用を支える機能的抽象化
- ③ 特別視されず背景化する記号的抽象化

という、三つの抽象化が生じる。すなわち工芸品は「具体的に作られているにもかかわらず、日常において抽象的な存在として扱われる」という二重性を帯びるのである。

ここで上出恵悟の《B-P-F》が示す意義が明らかになる。《B-P-F》は、石川県の伝統工芸である九谷焼の産地で製造される磁器製食器を素材としている。これらの素材は、本来であれば日常的に用いられる“抽象化された器物”として流通するものである。しかし上出は、それらを皿や碗としてではなく、積層可能な造形要素として読み替える。

さらに重要なのは、素地が釉薬の施しや焼成という不可逆のプロセスを経ることで、色味や質感、寸法、形態に微細な差異を生み出す点である。量産品として設計された素地であっても、焼成は必ず個別的な変化を伴う。上出はこの変化を逸脱ではなく、物質が自ら示す固有性として受け止め、積層の構成に取り込む。この過程を象徴するのが、Building（積層）、Processing（加工）、Firing（焼成）の頭文字からなるタイトル《B-P-F》である。

《B-P-F》では、日常性によって抽象化された器物と、焼成によって生じた具体的差異が同時に可視化される。日常の中では「ただの皿」「ただの碗」として一般性に吸収されていた器物が、上出の構成によって、抽象性と具体性という二つの相反する性質を併せ持つ存在として再び立ち上がるのである。

したがって《B-P-F》は、中原佑介が論じた日常性の抽象構造を工芸の領域で照射し、工芸品が日常使用によって帯びた抽象性と、制作プロセスがもたらす具体性が、どのように美術的形式の中で共存しうるかを示す試みであると言える。工芸品に潜む二重性を、彫刻的構成を通じて明確に示す点にこそ、この作品の意義があると考えられる。

* 中原佑介「日常性ということ」『眼』No.1、1965年6月、おぎくぼ画廊